行為法についての研究

―保育者・教員養成における観技の可能性について―

田尻　さやか

幼稚園実習の事前授業において、1960年代に松村康平により考案された心理劇における観客としての技法である「観技」を行い、観る力、かかわり方のトレーニングを行った。

観技における演者の演示内容を比較し、「みる人によって、状況関係認知がいろいろであり、ひとつとして同じみかたをしていないこと、他の人のいうことに気づき、驚きの体験」となる観技の演示の特徴は、①心理劇の特徴の一つである「今・ここで・あたらしく」表現されていること②役割や場面設定に工夫、意図があること③身体の動きや状況が空間的・時間的にも力動的であることが挙げられる。また、演示の仕方には、次の５つの要素（ア：あいまい性　イ：内面性　ウ：力動性　エ：場面変化性　オ：空間性）が必要である。それは、一つの要素だけが演示内容に影響するのではなく、いくつもの要素が重なり合い、どの要素もバランスよく表現されることが重要なことだと考える。

キーワード：心理劇　観技　実習事前指導　演示の内容分析　演示の観方

１．はじめに

１－１　心理劇について

「行為法」とは、一つの具体的な生きた人間関係の場であり、教員から学生への一方的働きかけのみならず、学生相互間の関係、学生から教員への働きかけ等の多角的関係通路を顕在化することが可能である。また、単なる知識の伝授のみならず、今、ここで新しく考え合う姿勢、働きかけ合いをとおして、はじめて生きた人間教育の実践が推進される。この基本原理を活かしている具体的方法が「行為法」である[1)]。行為法に関する理論と技法は人間科学の分野で、20世紀を通じて多く生まれ、消滅していったが、モレノによって創始されたサイコドラマ（心理劇）は、体系的な行為法として、その応用範囲は世界的な規模で広がり、その概念が革新されていった[2)]。

サイコドラマ（心理劇）は、1920～30年代にモレノ（Jacob Levy Moreno）によって、集団精神療法のひとつとして創始された。日本では、1960年代に外林大作、松村康平により「心理劇」と紹介されて以来、精神医療に限らず、教育・保育など様々な分野で、展開・発展されている。

日本において導入され、「心理劇」として実践されている方法の特色は①劇的役割表現の方法をとること、②自発性、創造性が重視されること③人と人とのいまここでの出会い、人間関係の力動に着目すること④監督、補助自我、演者、観客、舞台という要素（役割）により構成されること⑤集団における安心感（信頼感）、演者の自発性が促されていくためのウォーミングアップ、補助自我の役割が重視されることなどが挙げられる[3)]。

１－２　心理劇における観客体験の意味について

心理劇における観客体験は参加者にとって、どのような意味があるのだろうか。モレノ（1946）は「観客は主役と関係して世界を表現」し、観客として学ぶには「観客自体の社会心理学的心理構造を知ること」が重要と述べている[4)]。針塚、岡

東京家政学院大学現代生活学部児童学科

嶋（1997）の研究によれば、大学の授業時間に行った三つのセッションから、観客体験は心理劇の展開によって異なり、演者も観客も自己理解、自己表出を示したものは、「ソシオドラマ的な展開で、演者の心の動きや関係の変化を取り扱うもの」で、全体として「集団凝集性」の高いセッションであったという[5]。

土屋（2011）は心理劇における観客について、「観客は観客で在り続けて、劇で行われていることを観て・感じとりながら自らの体験と重ねて感じ・考えることができる」ことを一つの特徴として挙げている[6]。

１－３　観技とは

観技（状況認知体験）とは、1960年代に松村康平により考案された心理劇における観客としての技法である。松村（1967）は、観技の実技には「①観客に重点をおいて場面設定をし、演者は監督の意図を体して、言葉を使わずふるまうこと、②観客は演じる人をよく観ていて、どんなことをしたかを言う、③観る人によって、状況関係認知がいろいろであり、ひとつとして同じ観方をしていないこと、ほかの人のいうことに気づき、驚きの体験がうまれたら成功、④自分の観方は、他の人とちがう観方をして、それは自分にとって確実なことと実感すること、⑤演者は、『わたしはこういうようにしました』と言葉だけで知らせるのではなく、はじめにしたことと同じようにふるまいながら、今度はそれに、言葉をそえてふるまって、はじめになにをしたかが、観ていた人にわかるようにする」[7]と述べている。松村の述べた「状況関係認知がいろいろである」とはどのような場面なのか、これまでの研究では、明らかにされてきていない。本研究では、特に③の観る人によって状況関係認知がいろいろであるとはどのような場面設定で、どのような状況なのかを明らかにすることで、より充実した「観技」体験が成立するのではないかと考える。

２．研究の目的

吉川・田尻（2011, 2012）[8) 9)]において、観技の体験を通して観客は、①多様な観方の重要性、②自己の観方の意識化、③自他への肯定感、④環境空間と人の行為との関係性への気づき、⑤演者の表情、心情、場面、状況から観ること⑥行為の経過、見通しの重要性などが実感されたと捉えている。また、基本的な人間理解に必要な場面状況の把握、視線や表情、気持ちの察知、行動や振る舞いの追跡などの観方を育て、劇後の体験を共有、シェアすることにより、参加者からの多様な見方や人や事象の関係性、多様性、肯定性が体験的に学習されることが考察されている。

これまで、観技を行う際、演者の演じる内容（ドラマの内容）、監督・補助自我・舞台（空間）環境等との関係が観技をより充実させる重要な要素であることが示唆されていた[8) 9)]が、実際の演示内容の検討は行われていない。

本研究では、複数（5回、10セッション）の観技における演者の演示内容を比較し、「みる人によって、状況関係認知がいろいろである。ひとつとして同じみかたをしていないこと、ほかの人のいうことに気づき、驚きの体験がうまれたら成功」[7]となる観技の特徴について明らかにする。そして、より効果的で充実した観技の実施方法、すなわち幼稚園における観察実習（初等教育実習）に向けて、観る力やかかわり方を効果的に学習することができる「観技」の演示方法について考察する。

３．研究の方法

３－１　研究の方法と授業の概要

「初等教育実習指導」の授業で「観技」を活用し、実習に向けての事前指導を行う。各回は1セッション30分×2

参加者（東京家政学院大学児童学科　3年生）学生30～50名、教員2～3名（監督役1名、補助自我役1～2名）

本研究では、10セッション（5回分）を分析する。

実施期間　20XX年～20XX年＋5年

実施場所　3段舞台の設置されたプレイルーム。

分析方法　授業のビデオ記録、参加記録、学生の事後の自由記述、質問紙によるアンケート調査の分析による。

質問紙は①観方について　11項目（内容につ

いては後述)、②授業を体験して学びについて19項目、回答方式:「かなりある」～「ほとんどない」までの4件法、③感想・発見・気付き（自由記述）である。本研究では、質問紙の①観方について　11項目を分析に使用する。

なお、学生の心理劇体験については、単発的に他の授業で、軽いロールプレイや三段舞台を使用しての心理劇は1～2回体験している。

3－2　質問紙（観方についての調査項目）について

本研究の分析に使用した観方についての項目は以下のとおりである。項目作成にあたって、本研究で実施した1回目（20XX年）の2セッションの事後の自由記述の分析から吉川･田尻（2012）[9]が独自に作成した。

＜観方についての質問11項目＞

1. 演者の気持ちを察しながら観る
2. 演者が自分であるかのように観る
3. 演者の動きや振る舞いをたどりながら観る
4. 演者の演ずる状況や場面を捉え（イメージし）ながら観る
5. 演者の演ずる役割やストーリーを捉え（イメージし）ながら観る
6. 演者の演ずる舞台の形状や段差に注目しながら観る
7. 演者の表情や視線に注目しながら観る
8. 場面、ストーリーのなかに入り込んで観る
9. 場面、ストーリーに共感して観る
10. 何が起こったのか客観的に観察するように観る
11. 周りが気になったり他のことを考えながら観る

3－3　心理劇（観技）の手続き

1）ウォーミングアップ（なんでもバスケット、空気のボールなど。席が変わるように意図したもの）
2）実習と関連して観技についての簡単な説明。
3）監督が「これから舞台で演じる人を、よくみていてあとで、どんなことをしたかを言ってください」と観客に提示。
4）補助自我役の教員が演者となり、1人で3段舞台にてノンバーバルで演じる。
5）観客が各々「自分がどのように観たか」をそれぞれが書き留め、発表し合う。
6）演者がどのように演じたか、ことばとふるまいで観客に伝える。
7）教育的指導、配慮を交えたシェアリング。
8）質問紙の記入。

3－4　倫理的配慮について

本研究を行うにあたって、質問紙に本調査は研究のみに使用すること、授業評価に関わらないこと、個人が特定されるようなことがないように配慮し研究を行うことを明記し、対象者に説明を行い、研究を行うことについて了承を得ている。

4．結果と考察

4－1　観技の演示の特徴

本研究で対象とした10セッション（1回目は質問紙作成に使用、A～Fセッション）の演者の役割設定・行為の種類・演示の時間・演示内容について、まとめると、表1のとおりである。また、観技の様子を写真1～3で示す。

演者が行う演示は①ノンバーバルで演じる②ジェスチャーゲームではないと監督は説明するが、多数の観客が自分の観方と演示内容が一致することを期待する③1人で30人以上の観客の前で演じる④1回あたり40秒～1分程度演じることがもとめられていたことが改めて、分析から明らかになった。

通常、心理劇における演者は自分の解決したい問題を提示するなど「主役」と呼ばれることもあるが、観技おいては、監督の補助自我である。さらに授業の参加者である学生の学びになるよう、配慮した観客中心の劇を展開することが求められることがわかった。

松村は、観技の実施について「観客に重点をおいて場面設定をし、演者は監督の意図を体して、ことばを使わずふるまうこと」[7]としており、監督との事前、事後の話し合い等でセッションの意図を十分に確認することがより充実した観技を成功させるためには重要なことであると考える。

表１　５回（10 セッション）の演示の内容

回	セッション	役割	行為の種類	演示の時間	演示の内容
1	質問紙作成に使用	4 歳児	走る、座る、止まる、跳ぶ	26 秒	かくれんぼ友達から離れて、どこに隠れようか飛んだり跳ねたりしながら、隠れる場所を探している。
		5 歳児 男の子	ゆっくりと歩く、舞台の一番上でぐるっと見渡す、早歩き、しゃがむ、壁に寄りかかる	58 秒	警察ごっこのパトロール。眺めがよいところまで行って確認したり、居心地のよさそうなところに行って立ち止まったりする。秘密基地を見つける。あっちに行こう、こっちへ行こうと考えながら歩き回る。
2	Aセッション	3 歳児 女の子	走る、跳ぶ、のぞく、しゃがむ	41 秒	先生が遊ぶ時間だと言っていた。何をしようかとふらふらしていたら、風が吹いてきて、いろんな色、形の葉っぱが落ちていることに気が付く。ぴょんと跳んでみると虫にも気づく。虫と一緒になってピョンピョンはねて、わくわくする。
	Bセッション	高校生 男子	ゆっくりと舞台中央にけだるそうに座って上を眺める、はじからはじまで歩く、隅に行ってしゃがむ	45 秒	お昼を過ぎて５時間目。提出物を忘れて逃げてきた。裏庭から教室が見える。先生見えるかな、あっちからこっちは見えるかなと心配する。隠れようと思うが、友達に気が付かれないと困るので、隠れられない。
3	Cセッション	中学３年生 女子	歩く、のぞく、こぶしでたたく、眺める、しゃがむ	42 秒	先生に呼び出された。いい話があるという。悪いことはしていないはずだけれど。ドキドキしてきた。どうしよう、緊張する。先生の部屋をノックするが、いない。約束の時間だけれどいない。少し座って待つ。
	Dセッション	中学３年生 女子	C セッションと同じ。	46 秒	C セッションと同じ。
4	Eセッション	高校２年生 女子	ゆっくり歩く、すわって後ろに手をつく、きょろきょろする、かき集める、早く歩いて一番段の一番上へ、拾う	39 秒	海がきれいだなと眺めていた。失恋したばかり。砂をかきあつめた。風が吹いてきて、水族館のチケットが飛んで行ってしまった。２枚なくしてしまった。友達といこうと思っていたので、探す。１枚は見つかったけれど、もう一枚は見つからない。
	Fセッション	高校２年生 女子	E セッションと同じ。	48 秒	E セッションと同じ。
5	Gセッション	48 歳サラリーマン・男性	おそるおそるはじからゆっくりと歩く、2 段目に座る、何度も座りなおす、下をみる	48 秒	人間ドックに来た。胃カメラを待つ待合室に来た。とても苦手なので、いやだなと順番を待つ列に加わる。周りの人はいやそうではない。すごいな。とうとう次に呼ばれる順番まできてしまう。
	Hセッション	5 歳児の母	歩く、座る、手を振る、手をたたく、のぞく	52 秒	運動会の会場にこどもと会話しながら向かう。がんばると約束したり、先生に教えてもらったことをふりかえる。会場に到着し、子どもと分かれるが、観覧席で始まるのを待つ。運動会が始まり、立って手を振り応援をする。かけっこの応援ではおもわず手をたたいて、大声援をおくる。近所の友達も頑張っていて、もっとよく見える席がないかと探す。

写真１　心理劇の３段舞台での演者（補助自我）による演示例①（A セッション）

写真２　演者（補助自我）による演示例②（B セッション）

写真３　部屋全体の様子

４－２　観客の発言内容

表2．表３．表４に２回目、４回目、５回目の計６セッションで得られた観客の発言内容例を示した。

演示を観ての観客の発言の内容は、下記の５つに大きく分類されることが分かった。

①演者の心情にそくしながら、行為も捉える。
②演者の行為にそくしながら、心情も捉える。
③演者の状況や役割、ストーリーを捉える。
④舞台の形状、段差に着目して演者の状況、行為を捉える。
⑤演者の表情から気持ち、行動を捉える。

表中の○数字は分類を示す。

４－３　抽出した６セッションの演示内容の特徴

表５に分析に使用した６セッション（2，4，5回　A・B・E・F・G・H）の内容の特色を示す。

なお、抽出理由は①役割の設定に意図があったもの②舞台の使い方に違いがあったもの③１回につき２セッション行うが、それぞれのセッションでの演示内容を同一にするよう意図するか否か④動作の明確さ⑤状況変化的場面設定（空間的）⑥時間経過的（40秒の中で場面を複数設定する）場面設定の６項目について、特徴をまとめる。

観技における演者の演示内容を比較し、「みる人によって、状況関係認知がいろいろであり、ひとつとして同じみかたをしていないこと、ほかの人のいうことに気づき、驚きの体験がうまれたら成功」[7] となる観技の演示の特徴は、①心理劇の特徴の一つである「いま・ここで・あたらしく」表現されていること②役割や場面設定に工夫、意図があること③身体の動きや状況が空間的・時間的にも力動的であることが挙げられる。

また、演示の仕方には、次の５つの要素（ア：あいまい性　イ：内面性　ウ：力動性　エ：場面変化性　オ：空間性）が必要であると仮設した。

ア　あいまい性：その行為を見ただけで何をしているのか判断できないようなふるまい。

例えば、包丁で切るしぐさを手で縦にトントンと動かす、手で顔を覆って隠れていないいないば

表２　２回目の観技で得られた観客の発言内容例

A セッション	B セッション
①楽しそうにぴょんぴょん跳ねながら移動して、自分が気になったところで止まって、じっと見つめる。 ①はしゃいでいるようにはねていたが、その後、何かを発見して見つめる。 ②何かを探していた。 ③ひよこみたいな動きをして、段差をのぼりおりしていた。 ②ジャンプ・のぞく・探す。 ③妖精になっている。 ②バッタになって小さな虫をおいかけていた。	③ミッフィーかもしれない。 ③妖精となって、人間の世界を観察しに来ているように思った。 ②周りの様子を見て、みんなの中に入りたいけれど、はじっこで様子をみている子。 ②人を待っていたけれど、なかなか来ないからいじけてしまった。 ②海の近くの波打ち際で走ったり、たそがれたりしている。 ③窓の様子をみている。 ③公園でひなたぼっこ。 ③誘惑するセクシー美女。 ③立ち話をしているお母さんを待つこども。 ③動物園でやるところがなくてただぺたぺた歩いている、休んでいるペンギン。 ③待ち合わせをしている人。

表３　４回目の観技で得られた観客の発言内容例

Eセッション	Fセッション
②段に座り、しばらく腰かけたまま左右上を見て、右側の床をサッサッとなにか払うようにした。 ③砂場に来て座って空を見上げて、一息ついてから周りを見渡して、砂の中からカギのようなものを見つけて取り出し、誰のものなのか探している様子。 ③砂の中から宝の地図を見つけ、いろいろなところに行って、探していた。 ③何かカードやブロックなど集めて拾っているように見えた。 ③砂場に来た子ども。まず空を見上げて、何をしようかときょろきょろしてみる。とりあえず砂を触ってみる。少し離れたところにあったシャベルをひろい、砂場の真ん中で楽しそうにお山をつくっている子どものところに入ろうとしたが、入れない。 ②座った後に周りをみて、ごみがあったから他のところにも落ちているかなときょろきょろして探してみたら、あったので、立って取りに行き、他のごみも探そうとしてきょろきょろし、動きまわっていた。 ④左から歩いてきて一段目の右側に座り、うしろに両手をついて足をのばしてくつろいでいた。あたりをみわたして、右側にある何かを両手でかき集めた。それを両手でもったまま二段目にのぼって、三段目を通過して、二段目のところ降りてきて、また何かをひろった。一段目に立って、何か下の方を見て、何かを探していた。	②砂場の様子を見にまた保護者の方で、子どもの姿をみて安心し、少し周りに転がっているおもちゃをひろって、片づけながらリラックスしている感じに見えた。 ③川辺でボーっとしていたら、花を見つけてつんでいたら、いろいろなところにあり、たくさん花をつんでいるように見えた。 ③原っぱに日向ぼっこしに来て、花を見つけて花を摘んでいた。 ③海辺で貝殻を拾っていた人にみえた。 ③ピクニックに行って何か原っぱに入っていて、木の実を拾って楽しそうにしていた。周りをよく見て行動している子どもだと思った。原っぱの感触を楽しんだ後、風景を見ていた。 ③草むらに座って、のびのびとしている。その後、立ち上がって、松ぼっくりや木の実を拾い集めた。

表４　５回目の観技で得られた観客の発言内容例

Gセッション	Hセッション
③歩いてみて、座ってみて、周りに何があるのか見渡してみた。 ④段差を３段上がって、１段降りて、１回座る、立ち上がって２回目座る。立ち上がって３回目座る、手元を見て立ち上がって終わる。 ①悩み事を抱えていて、いてもたってもいられずすわっては悩んで、立ってまた座ってずっと悩んでいる。 ②人を待っていたけれど、なかなか来なくて、待つ場所を変えている様子。 ②周りの状況をうかがいながらうろうろしてたまに座っていた。誰とも話さず、その場に慣れていないので、落ち着かずうろうろしていた。 ⑤最初は見られていることが恥ずかしいのかと思ったが、座ってあたりを見回していることから、周囲を警戒してよく観察しているのではないかと思った。	③友達とバイバイして電車に乗って一人で歩いて帰っているように見えた。途中で手をたたいたところが意味わからなかった。 ③園で子どもたちが劇をやっているのに対し、先生が子どもに手を振ったり拍手をしたりしている場面を表現していた。 ③子どもを見に来た親 (運動会) 子どもを探したり、うまくいったら拍手。 ③電車のホームで友達と待ち合わせをして、きょろきょろと周りを見渡していて、友達と会えてうれしくなって拍手したのかな。 ③幼稚園に登園し、友達の遊びをみてどこで遊ぶか、見て、遊びを探している。その後、保護者に手を振って、椅子に座り、友達の発表に拍手をした。誕生日会をしている様子に見えた。 ③一人遊びをしていて、最初は何か物を探しているのかなと思った。教室を歩き回り、落ち気がない様子だった。拍手したのは友達または先生が何かやって拍手したのかなと思った。場面は登園の時だと思った。まだ友達が来ないので、しばらく１人遊びでそのうち増えていく。 ③子どもの野球試合を応援しに来たお母さん。 ②うろうろ、下を向く、遠くの人に手をふる、座る、拍手する、立つ、うろうろする　発表会かなと思った。

表５　分析に使用したセッションの演示内容の特色

回	2		4		5	
セッション	Ａセッション	Ｂセッション	Ｅセッション	Ｆセッション	Ｇセッション	Ｈセッション
役割の設定	幼児、女児。演者が女性であること、幼稚園実習事前指導なので容易に役割が推測される。	高校生、男。演者が女性であるにもかかわらず、男の設定。さらに幼稚園実習事前授業では想定されない高校生の役割。	中学生、女。演者の性別と同じ女を設定するが、幼稚園実習の対象である幼児の役割でない設定。	Ｅセッションと同じ。	サラリーマン、男性。演者の性別と異なる男性、普段の生活で深くかかわりあうことがないサラリーマンを設定。	幼児を育てている母親、女性。実習で出会う可能性のある母親役割の設定。
舞台の使い方	段差を生かし、飛び跳ね、力動的な動きをする。	ゆっくりと動くため、使われる場所は限定される。	舞台の一番上と一番下を使ったゆっくりした動き。	Ｅセッションと同じ。	3段ある舞台の2段目の端から端までをゆっくり使用。	段差を生かし、さらに奥行きも使った大きな動き。
1回の2セッションの内容を同一にするかどうか	異なる。 元気のよい、活発なテーマ。	異なる。 Ａセッションの内容を意識し、ゆっくりを意図する。	同じ。 開始前から監督と相談し、同一になるよう動きを覚えるようにふるまう。	同じ。 Ｅセッションでふるまい方を覚えたため、動きがスムーズ。	異なる。 ＧとＨセッションを同一に行うつもりでふるまったため、動きを覚えようとするが、集団の様子を見て監督と相談のうえ、別のテーマに変更することが急きょ決まる。	異なる。 Ｇセッション終了後、テーマの変更を行う。
動作の明確さ	走る、飛ぶなどダイナミックである。拾う、覗くなど基本的な動作が多い。	ゆっくりとした動き。見上げる、座るなどの具体的ではない動き。	砂をかき集めるしぐさ、きょろきょろまわりを観るしぐさから場面を容易にイメージしやすい。	Ｅセッションと同一動作ではあるが、2回目なので、よりなめらかで、演者自身がはっきりとイメージをもって表現する。	立つ、座るを繰り返し、表情もあまり変わらず表現する。	手をふる、手をたたく、お辞儀するなど動作がはっきりしているが、いくつもの動作が短い時間の中で次々とでてくる。
状況変化的場面設定（空間的）	園庭。途中、風が吹いてきたと設定。	学校の裏庭。遠くに人がいる設定。	波打ち際、砂浜。途中、風が吹いてきた設定。	Ｅセッションと同じ。2回目なので、よりイメージがはっきりと頭に描かれる。	病院の待合室。変化が少ない。	家から運動会の会場、競技ごとに場面が変化する。
時間経過的場面設定（1場面～3場面）	2場面。時間的に大きくとぶことはない。	1場面。時間的に大きくとぶことはない。	3場面。なくしたものがみつかるまで。時間経過が少しある。	Ｅセッションと同じ。	1場面。変化がない。	3場面。ダイナミックで次々と変化する。時間的に大きくとんで表現される。

あのようなしぐさをとると、あいまい性は低くなり、「驚きの体験」の可能性が低下する。

イ　内面性：表情や心情を細かに表現し、その心情を意図して演示するふるまい。

例えば、ふるまう中で顔の表情や演者自身の緊張が観客に伝わると、その意味や状況を観客がそれぞれ考え始めることがある。それは、演示内容を意図して表現されることもあるが、意図せず自然な形で出てくることもある。心理劇の特徴である、即興で演じたものを観客と演者が共有できる性質であり、ビデオや写真とは違った「観技」の特徴といえる。

ウ　力動性：身体をダイナミックに使い、活発に、躍動感がみなぎるふるまい。

例えば、表情や心情を顔だけでなく動きを速くする、動きの種類を多くすると、豊かで様々な場面の表現になりやすく、その逆に動きが遅く、動きの種類が少ないことだとより演者の気持ちや場面の状況がどのようであるかわかりにくい。

エ　場面変化性：時間的にも空間的にも場面を大きく変化させ、演示するふるまい

例えば、40秒の演示の中で時間の経過を飛ばし、ダイジェスト版のように場面を組むことで動きや場面に複雑さが出てきて、演示内容が様々にとれる演示となる。また、演者は場面を１場面でなく複数場面（3場面程度）イメージしながら演じると、場面そのものにストーリー性が出てきて、役割や場面構成にも広さ・幅がでてくる。

オ　空間性：3段舞台の段差も、空間も隅々まで大きく使い演示するふるまい

例えば、3段の舞台の形状（段差や広さ）にも観客の意識が向きやすいのは、広く大きく身体を使った表現であり、動きが狭く、小さいと部分的な気づきになりやすい。

演示内容は観客中心に意図して設定されることが重要であるが、それは「状況認知が様々」で「驚きの体験ができたら成功」となる演示は、先に挙げた５つの要素がいくつも重なり合い、どの要素もバランスよく表現されることが重要である。特にエの場面変化性を意識して演示内容を組み立てていくと、他の要素も含まれる場面が成立しやすいと考える。

４－４　各セッションごとの観方についての項目（質問紙）の分析

４－３で取り上げた３回（6セッション）の最後に「演者の動きについての観方はどのようであったか」について質問紙で調査した。その観方についての11項目は、「かなりあてはまる」を４点、「ややあてはまる」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「ほとんどあてはまらない」を１点とし、項目ごとにセッション（2回目　Ａセッションと Ｂセッション、4回目　Ｅセッションと Ｆセッション、5回目　Ｇセッションと Ｈセッション）の評価の平均値および標準偏差を算出した。さらに、各セッション６群によって、11項目からなる演示の観方がどのように異なっているのかをクラスカル＝ウォリス検定と Steel-Dwass の多重比較を用いて検討した（表6）。

11項目中６項目において、平均値の差が大きく、統計的に有意な差であるということができる。

「2　演者が自分であるかのように観る」「8　場面、ストーリーのなかに入り込んで観る」「9　場面、ストーリーに共感して観る」観方はＦセッションののびやかでストーリー性のある演示（同一演示の２回目で演者の緊張がゆるみ身体の動かし方がのびやかで表情も和らいだ印象がある・砂で遊び、風がふいてチケットが飛ばされ、やがて見つかる３場面の展開）とＧセッションの力動性に乏しく場面変化にも乏しい演示（表情の変化が乏しく、身体の動きが小さく静かである印象・病院の待合室で呼ばれるのを待つ場面）において平均値の差が大きく、統計的にも有意な差と認められた（Ｆセッション＞Ｇセッション）。Ｆセッション、Ｈセッションの演示には先にあげた５つの演示の要素（ア：あいまい性　イ：内面性　ウ：力動性　エ：場面変化性　オ：空間性）が複合的にみられ、豊かな場面構成となったと推察できる。一方、Ｇセッションの場面では特に場面変化性や力動性が

表６　各セッションにおける観客による演示の観方（各群の平均値と標準偏差およびクラスカル＝ウォリス検定の結果と多重比較の結果）

観方についての質問項目	Aセッション	Bセッション	Eセッション	Fセッション	Gセッション	Hセッション	P値	多重比較の結果
	N=41	N=46	N=43	N=48	N=38	N=45		
1.演者の気持ちを察しながら観る	3.15(0.53)	3.13(0.69)	2.72(0.80)	2.96(0.80)	2.84(0.75)	2.82(0.75)	0.054	
2.演者が自分であるかのように観る	2.15(0.61)	2.11(0.80)	2.23(0.68)	2.42(0.85)	1.92(0.88)	2.38(0.81)	0.030 ＊	
3.演者の動きや振る舞いをたどりながら観る	3.56(0.50)	3.33(0.60)	3.30(0.64)	3.33(0.48)	3.37(0.63)	3.24(0.65)	0.240	
4.演者の演ずる状況や場面を捉え(イメージし)ながら観る	3.39(0.67)	3.39(0.68)	3.21(0.67)	3.48(0.58)	2.97(0.91)	3.33(0.56)	0.066	
5.演者の演ずる役割やストーリーを捉え(イメージし)ながら観る	2.98(0.72)	2.87(0.78)	2.81(0.70)	3.27(0.64)	2.38(0.95)	3.13(0.69)	0.000 ＊＊	Eセッション＞Fセッション（＊） Fセッション＞Gセッション（＊＊） Hセッション＞Gセッション（＊＊）
6.演者の演ずる舞台の形状や段差に注目しながら観る	3.27(0.87)	2.50(0.81)	2.49(0.86)	2.83(0.69)	2.45(0.89)	2.36(0.98)	0.000 ＊＊	Aセッション＞Bセッション（＊＊）、Aセッション＞Eセッション（＊＊）、Aセッション＞Fセッション（＊）、Aセッション＞Gセッション（＊＊）、 Aセッション＞Hセッション（＊＊）
7.演者の表情や視線に注目しながら観る	3.29(0.64)	3.28(0.66)	3.21(0.64)	3.33(0.63)	3.50(0.60)	3.18(0.75)	0.326	
8.場面・ストーリーのなかに入り込んで観る	2.56(0.71)	2.50(0.81)	2.52(0.71)	2.88(0.73)	2.16(0.80)	2.56(0.62)	0.001 ＊＊	Fセッション＞Gセッション（＊＊）
9.場面・ストーリーに共感して観る	2.39(0.67)	2.31(0.79)	2.40(0.69)	2.65(0.73)	1.97(0.75)	2.44(0.62)	0.002 ＊＊	Fセッション＞Gセッション（＊＊） Hセッション＞Gセッション（＊）
10.何が起こったのか客観的に観察するように観る	3.32(0.57)	3.04(0.67)	3.12(0.77)	3.21(0.71)	3.16(0.86)	3.07(0.65)	0.450	
11.周りが気になったり他のことを考えながら観る	1.98(0.79)	1.91(0.78)	2.23(0.95)	2.46(0.82)	1.87(0.88)	2.29(0.92)	0.006 ＊＊	Fセッション＞Bセッション（＊） Fセッション＞Gセッション（＊）

平均値（標準偏差）　　＊：P<0.05 ＊＊：P<0.01

1点：ほとんど当てはまらない
2点：あまりあてはまらない
3点：ややあてはまる
4点：かなりあてはまる

乏しく、場面そのものに入りにくい、共感しにくいものとなっていると考えられる（Fセッション＞Gセッション、Hセッション＞Gセッション）。

「5　演者の演ずる役割やストーリーをとらえ（イメージし）ながら観る」（監督的観方）項目においてGセッションの平均値が低い（Eセッション＞Fセッション、Fセッション＞Gセッション、Hセッション＞Gセッション）ことに関しては、内面性が顕著に演示内容に影響していることがうかがえる。Gセッションでは、演示内容としては「あいまいとは何か」と深く考え、動きや表情をわかりにくい表現に工夫し、演者としての緊張感が意識しなくてもでていた。したがって、「何をしているのかわかりにくく」「いろいろにとれる演示」になったと演者としては満足しても、観ている観客にとってはどこを捉えていいのかわかりにくい。観技の体験、または場面そのものがなにやら不可解なものと捉えられた可能性が示唆される。また、観客の観方は演者の表情や座る回数など部分的で表面になりやすい傾向にもある。

「6　演者の演じる舞台の形状や段差に注目しながら観る」（観察者的観方）ではAセッションの平均値が高い。Aセッションはどのセッションよりも活発に動き、身体の動きが早く、元気であることから舞台全体の形状に目が行き、目の前で起こっている事実をしっかりとらえようとする観方が成立する傾向が高いことが明らかになった。

また、Fセッションにおいては「11　周りが気になったり他のことを考えながら観る」観方の平均値が高く、観技の演示内容そのものだけでなく、周りの参加者の反応や状況に大きく影響されている可能性も示唆される。

5．まとめ

各セッションには、観客体験や学びについて、共通点と各々の特徴（違い）があることが分かった。

各セッションとも、みる人によって様々な観方があることに気づく、という点は共通であるが、Aセッション、Fセッション、Hセッションでは、演者の心情を汲みながら行為を捉える観方が多く、観方を関係構造的に捉え、演者の状況や役割、ストーリーに着目する傾向、Bセッション、Eセッション、Gセッションでは、演者と自己を照らしあわせながら自己の観方を意識化する傾向、演者の表情、視線などに着目して観る傾向が見られた。セッションごとの違い（特徴）が生じた理由として、①演示の展開、内容が異なったこと、②各々のグループとしての関係性形成の違い、例えば、針塚ら[5]が述べた、集団凝集性の違いなども、影響されているのかもしれない。

観技体験を経て、幼稚園実習では「観察者として」事実を客観的に正しく把握する力「演者としての」子ども・教師と共に学び、共感し、幼稚園での豊かな生活を創る力「監督として」状況や場面を部分的だけでなく全体的に把握し、先への見通しを立て、今ここで新しく状況を発展的に創る力を培うことが大切であり、観技体験を通してその力の大切さを訓練するきっかけづくりとなったのではないかと考える。

観技における演者の演示内容を比較し、「みる人によって、状況関係認知がいろいろであり、ひとつとして同じみかたをしていないこと、ほかの人のいうことに気づき、驚きの体験がうまれたら成功」[7]となる観技の演示の特徴は、①心理劇の特徴の一つである「いま・ここで・あたらしく」表現されていること②役割や場面設定に工夫、意図があること③身体の動きや状況が空間的・時間的にも力動的であることが挙げられる。

また、演示の仕方には、次の5つの要素（ア：あいまい性　イ：内面性　ウ：力動性　エ：場面変化性　オ：空間性）が必要であると考える。それは、一つの要素だけが演示内容に影響するのではなく、いくつもの要素が重なり合い、どの要素もバランスよく表現されることが重要なことだと考える。特に場面変化性を意識して演示内容を組み立てていくと、他の要素も含まれる場面が成立しやすいと考える。

6．おわりに（今後の課題）

観技の体験を通して得る心理劇の観客体験には、人間理解に通ずる根源的な意味を含むと考えられた。集団全体の関係構造、特に集団の人間関係の有様にも影響されるのではないかと推察され

る。本研究では観技における演示内容の特色とその工夫についてビデオ記録や質問紙の項目分析から結果を得たが、今後、セッションの中で行われている、全員が参加者の前で見たものを言葉にして発表する「観客の発言内容」をグラウンデット・セオリー法などを使って整理し、演示内容と対応させ、質的に深めていくことを課題とする。

7．謝辞

心理劇（観技）実施、及び本研究の執筆について、多くのご助言をいただいた本学教授吉川晴美先生に深く感謝いたします。また観技に参加された、本学児童学科初等教育実習履修者にも謝意を表します。

なお、本研究は平成27年度本学若手研究者育成費助成を受け、研究をすすめさせていただいた。本論文の一部は第21回日本心理劇学会大会（2015.12　静岡）において「心理劇の効果Ⅲ　－観技における演示内容の検討」として発表したものを加筆、再構成したものである。

8．引用文献

1）佐藤啓子・小原伸子「人間科学における関係弁証法の展開（1）」人間科学研究1　19-32　文教大学 1979
2）武藤安子「人間関係の基礎理論－関係学からのアプローチ－」『関係＜臨床・教育＞－気づく・学ぶ・活かす－』 10-19　日本関係学会編　不昧堂出版 2011
3）吉川晴美「心理劇を通して豊かなコミュニケーションを育む」教育と医学　第63巻　第6号34-41　教育と医学の会　2015
4）J.L.Moreno『PSYCODRAMA』First Volume Becon House Inc.　1946 『サイコドラマ』 増野肇監訳 白揚社　2006
5）針塚進　岡嶋一郎「心理劇の場面構造と演者・観客の意識的体験」心理劇　第2巻　第1号　49-59 1997
6）土屋明美「心理劇と関係学－共に育つ－」『関係＜臨床・教育＞　－気づく・学ぶ・生かす－』 82-103 日本関係学会編　不昧堂出版　2011
7）松村康平「臨床心理学の方法」『臨床心理学』 朝倉書店　1967
8）吉川晴美　田尻さやか「心理劇の効果　－保育者養成における観技の意義－」日本心理劇学会　第17回大会要旨集　2011
9）吉川晴美　田尻さやか「心理劇の効果Ⅱ　－「観技」による自己評価アンケートから－」 日本心理劇学会　第18回大会要旨集　2012
10）田尻さやか　吉川晴美「心理劇の効果Ⅲ　－観技における演示内容の検討－」 日本心理劇学会　第21回大会要旨集　2015

（受付　2016.3.23　受理　2016.7.11）